

高齢者「親友たくさん」7.8%

政府白書 18年度調査から大幅減

政府は21日、2024年版の高齢社会白書を閣議決定した。高齢者を対象にした内閣府の調査で、親友が「たくさんいる」と答えた65歳以上の割合は7.8%にとどまり、前回調査の18年度の24.7%から大幅に減少。人と話をする頻度も少なくなっている実態が明らかになり、白書は「望まない孤独・孤立に陥らない

よつにするための対策の推進が必要」と指摘した。Ⅱ 関連②面 調査は、高齢者の住宅と生活環境に関して23年度に実施し、全国の65歳以上の男女2677人の回答を分析。18年度と比較した。「親しくしている友人・仲間がいるか」との質問で、「たくさんいる」と回答した人以外では、「普通

にいる」と答えた人も39.0%で、18年度の47.5%から減少。「少しいる」とした人は前回の21.5%から36.0%に増えた。「ほとんどいない」は12.6%、「全くいない」は3.5%だった。人と話をする頻度は「毎日」が72.5%で、前回90.2%から大幅に低下した。

また、子どもと「同居したい、同居を続けたい」人は23.2%で、前回37.1%から減少。「同居ではなく近居したい」は前回の27.7%から32.8%に増えた。年代が高くなるほど、同居の意向を持つ割合が高くなった。

内閣府担当者は、今回の調査で人付き合いの変化が見られたことに「コロナ禍の接触制限が影響した可能性がある」と話す。1人暮らしの高齢者が今後増えるの見込まれ、白書は「家族が担ってきた日常生活におけるさまざまなサポートを地域や社会でどのように担っていくかさらなる検討が必要」としている。

趣味多様化、役員なり手不足…

老人クラブ残したい



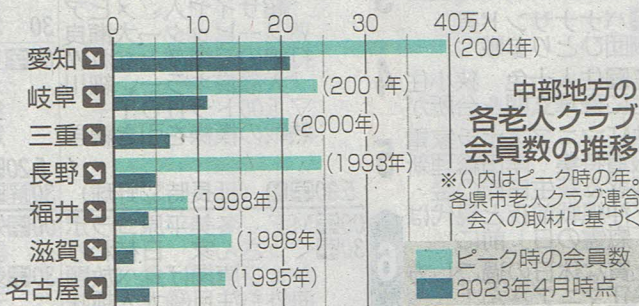
「eスポーツ」体験会でゲームを楽しむ高齢者たち＝2月、名古屋市東区の愛知県社会福祉会館で（愛知県老人クラブ連合会提供）

政府が閣議決定した「高齢社会白書」では、人との付き合いが希薄になりつつある高齢者の姿が課題として浮かんた。そうした中で、高齢者同士がつながる場として機能してきた老人クラブが減少を続けている。趣味の多様化や働き続ける高齢者の増加などで会員数はピーク時から半減。一方、超高齢社会でこそ存在価値が高まると考え、活性化を模索する動きもある。

（梅田歳晴、横井武昭） ●面参照

「老人クラブの友だち、
仲間同士が元気に仲良くし
りうれしい」

愛知県津島市老人クラブ連合会の日比正光会長(83)は笑顔で話した。連合会は53の老人クラブで構成し、会員は2450人。クラブ



会員数 98年ピークから半減

インドゴルフやボウリング、大正琴など、スポーツや文化活動に打ち込む。

3362人、クラブ数8万1579にとどまる。本紙が中部6県と名古屋市の老人クラブ連合会に取材したところ、同じ傾向が浮かび上がった。特に長野県では、ピークだった93年の24万6801人から昨年4月1日時点で4万9318人に激減した。

新型コロナウイルス禍を経て、クラブ数や会員数は減少傾向だが、歯止めをかけようと知恵を絞る。会員カードを作成し、協賛店を募ってカード保有者に特典を出すような仕組みをつくらたり、太鼓を打つゲーム「太鼓の達人」を通じて親睦を深めたりしている。

趣味の多様化、組織や地域に縛られない生き方の広がりなどが要因とみられる。年金支給年齢の引き上げで、60歳を超えて働く人も少なくない。役員のみならず、手不足も要因の一つという。

日比会長は「一年を重ねれば行動範囲は狭くなるからこそ、町内に居場所があることが重要」と強調。「地域で気の合う仲間と過ごし、健康を保つことが、豊かな人生100年時代につながる」と、老人クラブの存在意義を説明した。

大都市圏でありながら地縁や血縁が強いとされ、会員数が21万人余りで全国1位の愛知県でも、新城市老人クラブ連合会が市町村単位の連合会として県内で初めて解散を決めた。同県老人クラブ連合会の事務局担当者は「クラブの数は減っているが、仲間や生きがいをつくる場としての重要性は変わらない」と指摘。新しいレクリエーションを提案するなど老人クラブの活性化の支援に力を入れている。

全国老人クラブ連合会によると、1998年の会員数886万9086人、クラブ数13万4285をピークに減少が続く。昨年3月末時点では会員数405万

いるが、仲間や生きがいをつくる場としての重要性は変わらない」と指摘。新しいレクリエーションを提案するなど老人クラブの活性化の支援に力を入れている。